

# 汲古一心

## 『今の学書』

私が自分の体質の弱さが何からくるのかと考えて、少し宗教に深い入り気味になった時分、禅語録を提唱してくださる老僧が、ある時、ある田舎で姉さんが嫁さんに「そば食べたいが……」と頼んだら、「今日はそのそばは出来ない……」。「じゃそば粉を分家からもらってきてくれ……」といったら、「そば粉は家にもあります」。「じゃ道具をどこかへ貸したのか……」と問うと、「道具はどこへも貸しませんが……」と訊いたら、「今」と訊いたら、「では一体何がなくて作れんのか」と訊いたら、「今のところ私には作る気がねえんだ……」とシヤアシヤアと答えたという。

老師の曰く、これでは絶対にそばは喰えない——もし喰わせたい、作ってあげたいという気があれば粉を借りてきても道具を借りてきても作れる筈だ——と説いて、何でも先に立つのはまずヤル気があるかないかである、と喝破された。

文献が氾濫していても、類本が山ほどあっても読んで消化する気のないのは駄目であることは、むかしも今も全く同じである。

ついでの話だが、これだけ案内書でも字引でも揃っているとなつても、何にでも飛びついて読めばよいかとなると、そうでもない。「悉く書を信ずれば書無きに如かず」という金言がある。もの盛んな時には、ついでに儲かればよいで、いい加減なものも大分ある。金だと思つて随分つまらぬものを購つてしまうこともある。私なども大分こんなものを買ひこんで、後悔もし、大金を捨てたか落したような苦い思いもさせられたが、やはりそれは自分が一見、見破るだけの眼に欠けていたんだと、汗を拭いている次第です。

こういう話をする事になると、幕末の越後の名僧良寛の行実というものは有名で、人間としてすばらしい良寛が、生活の折々に作つた詩歌、書にその芳芬を漂わせて、書でも詩でもみな自然に良寛になり切つてゐるのだらう。さてその良寛の詩集を読むと、巻の終わりに近いところに、玉島の円通寺修業時代の友達の僧が、いつも

畑を耕して大根や菜を作り、汚穢を汲んで施肥をしたり、木を伐つて薪をつくつたりして、一向に禅の勉強をしているように見えなかつた。が、今から考えると、あれが本物の禅者であつたんだ。当時は見て見えず、つまらない男だと思つていたことは残念であつたと、嘆息している詩がある。あの清僧の良寛もよほど後年になつて、あれこそ本物の坊主だつたんだ。当時見ても見えなかつたんだがといつてゐるのは、書籍の選択でも同様で、まず使う気になつて見分けることは大事である。

いい時代で、やる気になればどんな道でも展げてくる時運である。こうなると欲の多い人は大抵ものにならない。歌なら歌、詩なら詩、書なら書と、ひとつの目標を立てて、つとめて眼を方々へそらさないようにして、一意専心にやるほど強いものはない。

私は少年時代から、論語にある「一以貫之」という言葉を大事にしていて、「一以つて之を貫く」と、他の仕事をしてゐる時でも、基本のものは書以外ないと堅く守つて、とにかく月給をいただいた

一織萬華（素堂悟人之句）昭和50年  
「筆間雜記」中村素堂隨筆集昭和六十三年刊より転載。



り学んだりしてきた。少し頑固爺だと自覚もしているが、「我は作さざる処あり」で、一切流行について行かなかつたことは、古い友人も苦笑し黙認してくれていたようだ。

「書範」、昭和56年8月